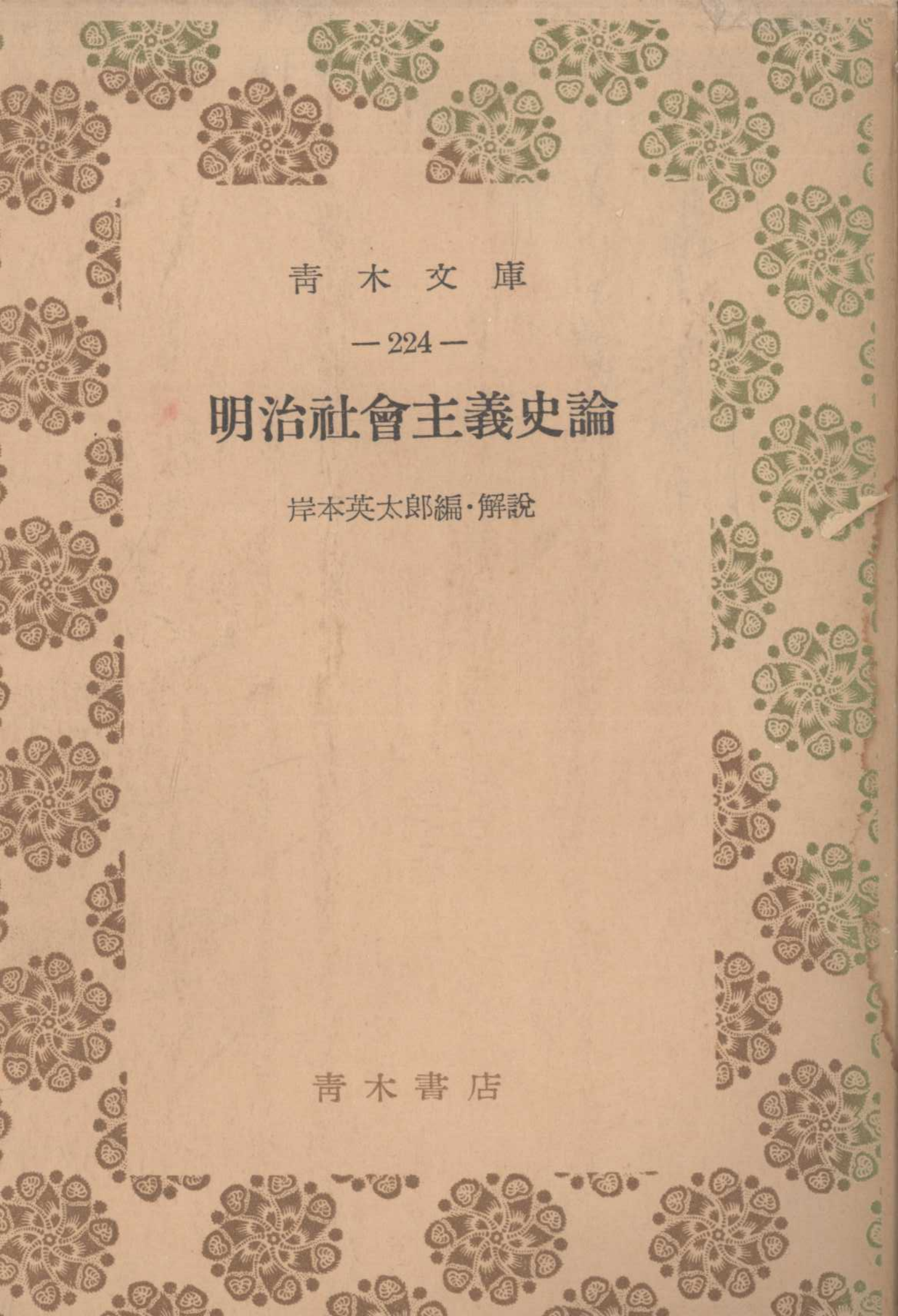




青 木 文 庫

— 224 —

明治社會主義史論

岸本英太郎編・解説

青 木 書 店

編者略歴

1914年 岡山市に生る

1937年 京都大學法學部卒業

現 在 一 京都大學經濟學部助教授

著 書 一 「社會政策論の根本問題」「日本勞働運動史」
「社會政策論」「日本の勞働問題」等

青木文庫

一九五五年四月一日 初版

明治社會主義史論

定價七拾圓

編 者 岸 本 英 太 郎

發行者 青 木 春 雄

東京都千代田區神田神保町一ノ六〇

印刷者 中 内 佐 光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

東京都千代田區
神田神保町一ノ六〇

株式會社 青 木 書 店

電話東京(29)一九〇四番
八三二一番
振替東京 三六五八二番

（青木文庫解説總目錄）を小賣書店で御請求下さい

青 木 文 庫

— 224 —

資料日本社會運動思想史明治後期第3集

明治社會主義史論

岸本英太郎編・解説

青 木 書 店

資料日本社会運動思想史刊行のことば

近代社会運動の歴史がはじまっていろいろ、すでに久しい。わが国においても、労働者農民を中心とする勤労大衆の社会的解放のための諸運動は、資本主義の形成と同時に始まり、その成長とともに発展し、今日すでに数十年のながい歴史をつみあげている。平和・独立・自由をめざすげんざいの日本国民のたたかいは、過去数十年にわたるこれら社会運動・労働者農民運動の経験と成果のうえにたっているのである。

しかるに、このながい歴史的伝統を体系づけ、その貴重な教訓を集約し、げんざいの国民的諸運動に真にやくだつような社会運動史の編さんや記述は、まだ十分になされていない。そうした歴史記述にかくことのできないいくつ重要な文献資料の類すらが、まだ完全にまとめられず、かえってますます散逸し、大衆の眼から遠ざけられていくような状態にあるのである。

それでわれわれは、細部におよぶ文献の蒐集整理は将来のこととして、ここにとりあえず、今次敗戦までのわが社会運動の歴史の研究と理解に必要とおもわれる基本資料だけでもいちおう系統的に整理し、公けにしようと思図したのである。

周知のように、わが近代社会運動の歴史は、自由民権運動から明治三〇年にいたる前史の時期、明治三〇年代から第一次大戦までの最初の勃興期、大戦後大正年代における運動の復活開花の時期、昭和年代にはいつてからの全面的な展開期と、今次第二次大戦までに四つの主要な発展段階

をへてきている。そこで、ここでは全体を明治前期・明治後期・大正期・昭和期の四つにわけ、それぞれの時期の運動の歴史資料・とくに運動をみちびき支配した主要思想と主要潮流にかんする諸文献を体系的に編集し、これに適宜解説をくわえつつ、順次刊行することとした。このばあい、今日一般の眼にふれることのむずかしい新聞・雑誌などの論文・声明その他の文書を主にし、まとまった著書・歴史書の類を従とした。

かぎられた人員と能力でなされるこの企画が、日本社会運動の歴史的研究・そのかがやかしい遺産の摂取・今日の運動のいっそうの推進等のために、いくらかでもやくだつところがあれば幸いである。さいごに、読者諸君がげんざい入手しがたい文献資料の所在や蒐集について、何らかの御協力をたまわるよう切に願います。

一九五五年三月

編纂委員会

凡 例

一 本書は三つの論文、すなわち石川旭山(三四郎)編・幸徳秋水補「日本社會主義史」(月刊「平民新聞」連載、明治四十年一月—三月)、山路愛山「現時の社會問題及び社會主義者」(「獨立評論」第三號、明治四十一年五月刊)ならびに安部磯雄「社會主義小史」(大隈重信編「開國五十年史」下卷に收録、明治四十一年刊)を編纂せるものである。

例 一 これらの論文の意義については卷末の解説を参照されたいが、黎明期日本社會主義運動の最昂揚期に、時を同じゆうして、これら三つの日本社會主義史が執筆されたことはまことに意義が深い。

凡

一 明治期に書かれたまとまつた日本社會主義史の論稿はこの三つだけであり、多くの研究者によつてつねに参照され、参考となつてきた古典的文獻である。最初の二つの論文は、かつて明治文化全集第二十一卷「社會編」に收録されたことがあるが、入手、閲讀のきわめて困難な貴重な論文である。ここに安部磯雄の論稿とともに「明治社會主義史論」として一書に編纂したが、これによつて、讀者は、明治社會主義史の古典にぢかに觸れることができるわけである。

一 明治勞働運動史の古典たる片山潜・西川光二郎共著「日本の勞働運動」(明治三十四年刊、岩波文庫に複刻版あり)とともに廣く讀まれることを期待したい。

一 これらの論文はいわば通史であり、社會主義運動とその思想の詳細については觸れるところ

が少ない。これらの點については、本叢書中の筆者編「明治社會運動思想」上・下を参照していただきたい。互にあい補つて明治社會主義史の理解に役立つであらう。

一 原文にはそれぞれ（とくに安部磯雄「社會主義小史」）に若干の年月や固有名詞や統計數字に誤記があり、これを訂正した。ただ、山路愛山は「労働組合期成會」を「労働組合期成同盟會」としているが、これはそのままとした。

一 安部磯雄の「社會主義小史」には上欄にそれぞれ見出しがついているが、これは本文中に入れてゴシック體で表わした。なお、本書一三七頁の見出しの一つ「鐵工の組合」は、原文では「鐵工組合」となっているが、これは「同盟進工組」のことで、明治三十年十二月一日に結成された「鐵工組合」ではない。これと區別する意味で「鐵工の組合」とした。「鐵工組合」といえば、固有名詞の「鐵工組合」を想起するのが通常だからである。

一 編集にあたつては、ルビ（安部磯雄「社會主義小史」にはルビはついていない）は削除した。ただ、讀者の便を考慮して、若干の判讀困難のものには附しておいた。句讀點は讀み易きよう變更し、假名づかいは、一切、原文に従つた。

目次

刊行のことば……………三

凡例……………五

日本社會主義史……………九
石川旭山編
幸徳秋水補

一 緒論……………九

二 民主主義の輸入……………二一

三 社會黨、コムニunist黨の名稱を聞く……………二三

四 東洋社會黨起る……………一六

五 自由黨員の運動……………二三

六 歐化主義……………三〇

七 民友社……………三四

八 國會開く……………四一

九 日本勞働協會及び普通選舉期成同盟會起る……………四八

一〇 日清戰爭……………五三

一一 日清戰爭後の社會問題……………五四

一二 勞働運動……………五九

一三	社會主義研究會起る……………	六九
一四	社會民主黨起る……………	七六
一五	社會民主黨の禁止……………	七六
一六	社會主義協會の運動……………	八〇
一七	平民社……………	八一
	現時の社會問題及び社會主義者……………	八五
	社會主義小史……………	八九
解 說……………	岸本英太郎……………	一三二

一 緒 論

日本に於ける社會主義が、獨立せる一個の勢力を成せるは最近の事實なり。然れども、其源を歴史の潮流に溯りて尋ねれば、由來する所、寧ろ意外に舊きを覺ゆべし。

明治政府の組織漸く其緒に就くや、最初に行はれたる政策は、歐風の模倣、民政の實施、即ち是なりき。而して歐米に存在せる殆ど總ての制度文物は生吞活剝せられて盛に輸入せられたり。かくて其當時、既に佛、獨の間に有力なる運動を試みつゝありし「社會黨」の名は、亦た同時に輸入せられし也。然れども、當時に在ては是れ素より平原を奔馳する大河流に落つるの滴々の露に過ぎざりき。

明治の歴史漸く進みて十四五年の頃に至り、政黨の運動が多く諸方に勃興するや、「社會黨」なるものも亦同時に組織せられたり。然れども、是れ亦一箇の勢力を成すに至らず、泡沫の如く起りて泡沫の如く消え去りぬ。

更に進んで、明治廿三年に最初の議會が開かるゝや、識見あるの士は、既に其の平民の代表機關たるに足らざることを看破し、漸く貧富の問題を云爲するに至れり。而して始めて研究的の眼を開いて社會主義を迎ふる者亦各所に出來^{いできた}れり。此時に當り歐米に於ける社會黨の運動は漸く發

達の歩を進め、熾んに萬國共同の運動を試みつゝありき。之を目撃する日本人の或者は頗る驚愕の聲を放て頻りに本國に報導したり。又當時、或は翻譯に或は著作に、社會主義書の出版せらるゝもの尠からず、新聞、雜誌、亦た多く之を論題となせり。

日清戦争の結果は、産業の驚くべき膨脹となれり。然して富豪は漸く奢侈に赴けり。資本家は漸く労働者を暴壓し來れり。かくて労働問題貧富問題は漸く世論となれり。労働運動は萌芽を發し、社會主義研究會は起されたり。恰かも、滿庭の梢、將に綠芽に綻びんとするに似たり。連山の麓、幾多の水源は湧然として溢れ出づるに似たり。然れども、未だ春花に頬笑むに至らざりき、谿流合して大河を成すに至らざりき。

斯の如くにして明治卅四年は來れり。彼の社會民主黨が初めて創立せられしは即ち此年なりき。從來區々の運動を爲し來りし労働者と學者とは、此に於て將に結合せんとしたり。數箇の谿流は合して一つの河流を成さんとせり。然るに、不幸にして政府の禁止する所となれり。

されど社會民主黨は之を禁ずべし。天下の大勢は之を禁ずること能はざる也。社會主義協會は其の運動の命脈を繼續して之を平民社に傳へたり。

平民社は甚だ小弱なりき、平民社の生命は短りき。然れども、彼の一生が少くとも日本の思想界に對して一點革命の口火たりし事は、敵も味方も否定する能はざる所ならん。

平民社亡びて茲に一年三箇月、一陽來復の春は再び吾が平民社を産めり。今此新なる平民社樓上に於て、此社會主義の歴史を綴る、豈に快ならずや。

二 民主主義の輸入

徳川氏の封建制度を破壊したる維新の革命を以て單に王政復古の事業なりと爲すは、彼の歴史家が保守的思想に阿諛したる獨斷なり。

維新の革命は單に政治的の革命にあらずき。社會萬般の根本的革命なりき、日本思想界の大革命なりき。從僕は主人に代つて起れり、武士は富豪の前に膝を屈したり。而して總ての方面に通貫したる最も著しき現象は民主主義の輸入即ち是なりき。而して民主主義の輸入は歐化主義の結果なり。

明治五年、岩倉具視を始め、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等歐米諸國に使して歸る。思ふに彼等は、大なる驚異を以て歐山を越え、大なる歎美を以て米水を渡り、而して遂に歐洲文明のバプテスマを受けて來りしならん。

明治六年、明六社なるもの起る。森有禮之を首唱し、福澤諭吉、加藤弘之、箕作秋坪、同麟祥、西村茂樹、津田眞造、西周、中村正直、杉享二等之に加盟す。是れ實に最も著しき歐米文明の輸入者にして、新日本思想界の開拓者なりき。

前者は廟堂にありて専ら實際政策に歐化主義を行はんとし、後者は民間に向つて専ら思想界の開發を試みんとせり。而して斯の如きの時に當り、英氣横溢たる青年にして滿腔の野心を懷いて歐米より歸朝せる者亦た甚だ多かりき。

日本人が歐米の文明に接して最も著しく其神經を刺激せしものは實に自由平等の思想なりき。

明六社の頭領たる福澤が、其の著「學問のすゝめ」に於て、開卷第一に叫びたるの一句は何ぞや。「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」即ち是なりき。彼が急進的革命的の叫びは耳を裂く霹靂の如く然りし也。

更に驚くべきは、彼の帝國大學總長にして、今の極端なる國權論者たる加藤弘之の民主論なりとす。乞ふ、彼が明治七年に著したる「國體新論」に就て之を見よ。

試に思ふべし、君主も人も、人民も人も、決して異族の者にあらず。然るに獨り其權利に至りては、斯く天地霄壤の懸隔を立てしは抑何事ぞ。かゝる野鄙陋劣なる國體の國に生れたる人民こそ實に不幸の最上といふべし。

名賢碩儒と仰がるゝ輩と雖、此の如き姿の非なる者を悟りし者は一人も之なきのみならず、却て之を是として頻りに尊王卑民の説を唱へ、益々此の如き野鄙陋劣の姿を養成せる事明瞭也。就中、本邦に於て、國學者流と唱ふる輩の論説は、眞理に背反する事甚しく、實に厭ふべき者多し。……遂に天下の國土は悉皆天皇の私有、億兆人民は悉皆天皇の臣僕なりとなし、……天皇の御事とさへ云へば、善惡正邪を論ぜず、唯甘んじて勅命の儘に遵從するを眞誠の道と説き、是れを以て國體となし、本邦の萬國に卓越する所なりとせり。其見の陋劣なる、其説の野鄙なる、實に笑ふべき者と云ふべし。

加藤にして斯の如し、以て當時の一般社會が如何に自由平等の思想に酔えりしかを知らん。此の時に當り、社會黨の名は、又た此の大潮流に混じて輸入せられたり。

三 社會黨、コムニニストの名稱を聞く

「日本言論自由の史上に於て、明治六七年の頃は實に其黄金時代とも稱すべき時代なりき。蓋し、幕府倒れて封建制度滅び、社會の總ゆる舊習慣舊法律は悉く其力を失ひ、何れの方面に於ても新思想新施策を喜び迎ふるの時代なりしを以て也。若し此當時の有様を今日に比すれば、吾人は今日の政治が少くとも言論の上に於て極めて專制横暴なるを覺ゆるなり。

されば前回に紹介したる加藤弘之が民主論の如きも、若し吾人の筆を以て言はしめば、朝憲紊亂の罪を成立するも未だ知る可らず。然れども當時は之を全然自由に唱道して憚らざりし也。

此時に當りて、日本政府部内に一變動は起れり。征韓論に關する西郷、大久保の衝突即ち是なり。西郷、板垣等は議行はれず袂を拂ふて各々故郷に歸りたり。而して青年有爲の士にして其後を慕ふて集り來るもの甚だ多かりき。西郷の結社は十年の役に於て墓なく滅亡したれども、板垣を中心とせる土佐の青年結社は後の政黨運動の萌芽となれり。彼等は其意見に於ては實に急進的革命論者なりき。彼等は佛蘭西の革命史に心酔せる極端なる民主論者なりき。歴史家は當時の土佐青年結社の事情を記して曰く、

高知に三大政社あり、曰く立志社、曰く靜儉社、曰く中立社はなり。立志社は則ち板垣の率ゐる所にして、社員一千餘人あり、洋學所を開き法學所を設け、日々夜々自由民權の説を講じ、或は佛國革命を童謡に作て市街に歌謳せしめ、或は魯國社會黨の非運を小説に作つて傳唱せしめ、以て自由民權の説を平民に知らしめんと勉めたり。云々

彼等は此時既に社會黨の名を知り得たり。然れども其思想は猶ほ個人的自由民權論なりき。再言すれば、彼等はルーソーの民約論を以て其頭腦を作り、社會黨の運動を見て其精神を鍛えたり。然れども彼等は當時歐洲に於て盛んに活動しつゝありしマルクスやエンゲルスを未だ知らざりし也。一八七五年（明治七年）初めて協同の運動を爲さんとせるラサールとリーブクネヒトの在りしをも未だ知らざりし也。況や其學說思想に於てをや。要するに、彼等は佛蘭西革命史に養はれたる自由民權主義者ながら、新奇なる社會黨（又は虛無黨）の運動を聞きて、心を躍らせし者なりき。

されば社會黨の名は、必ずしも一般に同情を以て呼ばれたるに非ず。蓋し歐洲に行はれし總ゆる思想感情は常に海を渡りて日本に入り來れり。當時歐洲に於て社會黨の運動漸く有勢ならんとするに際し、之を厭忌することも亦漸く多く、殊に其分配論を以て懶惰者の乞食根性なりと嘲弄せる如き、決して珍しき事實に非ず。而して此の如き社會黨輕蔑の感情は亦た日本にも輸入せられし也。即ち當時日々新聞が華族士族を攻撃したるの文中に曰く、

彼等は平民の租税によりて衣食する寄食人にして、寄食人をして其主人たる平民と同じく政權を有せしめんとするは、即ち社會黨の如き普通選舉の急激論なり。

個人主義の基礎に立てる民權論者が社會主義に對して此言あるは寧ろ何の不思議もなし。唯だ其「急激論」の一語あるは、以て當時の人が既に恐怖の念を以て「社會黨」の名を呼びたるを知らん。

言論は自由なりき、歐化主義は盛なりき。而して社會黨の名は日本人の耳に入れり。而して更

らに吾人は「コムニユニスト」黨の名さへ當時の人に呼ばれたるを見る。

明治六七年の頃に於る日本の思想界は、之を佛國流の民權派、英國流の功利派、獨逸流の國權派の三派に區分することを得べし。民權派の人々は其心情に於ては社會黨、虛無黨の運動に深く同情し、大に稱讃の聲を放ちたりしと雖ども、思想は却つて反對の個人主義たりしなり。而して英國流の功利派は其の經濟論の上より共產主義と相容れず。獨逸流の國權派に至りては政治論の上より之に反對したるならん。

此頃、例の加藤弘之（國權派）が個人的功利論者の福澤諭吉に與へたる論文中に曰く、

先生の論は「リベラール」なり。「リベラール」は決して不可なるに非らず。歐洲各國近今世道の上進を裨補する、最も「リベラール」の功にあり。去れども「リベラール」の論甚だしきに過ぐるときは、國權は遂に衰弱せざるを得ざるに至るべく、國權遂に衰弱すれば、國家も亦た決して立つべからず。フランスと云へる人の國家理論に、「リベラール」黨と「コムニスト」黨との論は全く相表裏すれども共に謬れり。其故は「リベラール」黨は務めて國權を減縮し、務めて民權を擴張せんと欲す、故に教育の事、電車の事、郵便の事、其他總て公衆に係はれる事をも悉皆人民に委托して、決して政府をして是等の事に關せしめざるを良善となす。然るに「コムニスト」黨は務めて國權を擴張し、務めて民權を減縮して農工商の諸業をも悉皆國家の自ら掌るを良好となす。蓋し二黨各々國權に相分るゝ所以を知らざればなり云々、と謂へり。

と。其の「コムニスト」と稱するは、蓋しマルクス、エンゲルス等を指せるなり。而して科學的社會主義に對する最初の、而も幼稚なる非難が、個人的自由主義に對する非難の同伴として紹介